

Visibility

せきね やすじ
関根 泰次

東京大学名誉教授/元電気学会会長



かつては人類の未来を担うエネルギー源として世界の注目を浴びていた原子力も今の世の中では様変わりの状態である。大学でも志望する学生が少なくなっていると聞く。原子力が敬遠される理由はいろいろなところでいろいろな人によって議論されているが、筆者の経験ではオープンに人前で口に出さないものの世の中で相当に良識があると思われている人も原子力に一步距離をおく人達がかなりいる。そう考えている理由について聞いてみると正確な事実を把握していかなかったり、事の重要性の軽重について我々と相当違った認識をもっていることに気付かされる。そのような認識のもとで考えれば、その人が原子力に距離をおくのも無理はないと思われる場合が少なからずある。これを原子力のPR不足とかその人の勉強不足だと言ってしまえばそれまでであるが、その人も本来の仕事をもっているわけであるから、原子力問題に思考をめぐらせる時間も限られるであろうし、強ちその人の怠慢といって責めるわけにもいかない。我々とて自分の専門分野からちょっと離れた分野の事になれば、似たり寄ったりの（専門家の眼から見れば）偏った認識や判断しかできないであろう。これは非専門家の宿命といえるかもしれない。

そもそも専門家、非専門家というより前に世の中の事は理性以外のものろもろの力で動かされていることは、我々の周囲に数多く見いだすことができる。原子力についても「嫌いなものは嫌い」という感情論から出る反対意見も世の中のひとつになり得るし、民族紛争に見られる憎悪、ユダヤ人問題に見られる偏見、時には錯覚、誤解、無知、更には貪欲、悪意、狂氣、恐怖、怨念など世の中を動かしているのは理性だけではないのは確かである。むしろこの世の中で事実の正確な認識に基づいた理性的な判断で動かされている部分は極めて僅かな部分にしかすぎないように思われてくるし、事実歴史はそのことを実証しているようでもある。理性だけで動けばこの地球上には戦争もないであろうし、飢餓、貧困などの問題もかなり軽減されるに違いないが現実はそうではない。

ところでマスコミをはじめ世の中の動きを決めるのは数

の上で圧倒的に多数を占める非専門家の人達である。世の中で識者といわれる人でさえ上に述べたような事情であるから大多数の人々が仮に善意であったとしても専門的な知識の欠如、不足から結果的に感情や偏見、誤解、無知、錯覚など理性に基づいた正常な判断以外の力によって動かされてしまうことがある。時には理性的思考とは全く無縁な「時の勢い」としか説明がつかないこともまま起こりうる。

極めて高度の専門的な分野についても社会に受け入れられなければその活動が続け難いことは冒頭に述べた原子力の例を引くまでもなく、我々の周囲に沢山見いだすことができる。分野によっては、社会的に受け入れられるか否かが、その分野の学問や技術の消長にまで決定的な影響を及ぼしかねない。ひと昔前なら学者や技術者などの専門家あるいは学会も世の中の動きに超然としていたり、場合によってはそのような態度を尊しとする考え方もないではなかった。しかし、現代は専門家が専門的な事だけを行っていて済む時代ではない。

世の中に受け入れられるためには普段から社会一般の人から「わかりにくい」と思われることのないように努力する必要がある。問題が起きてからではアッという間に「わかりにくい」が「うさんくさい」に転化する。一旦この状態になると正常な状態に回復するのは大変であるし、高度情報社会ではますますこの傾向が強くなる。Visibilityのない分野は、世の中の力によって強制的に消滅させられるか、よくても自然消滅を迎えるを得ないことをよく認識すべきと思う。筆者の専門分野の周辺でもこの意味から見直しを必要とする分野が少なからずあるように思う。

それでは「わかりやすい」ようにする、つまり Visibility を高めるためにはどうすればよいであろうか。透明性 (Transparency) を高めることはもちろん大切であるが、とてもこれだけでは十分でないであろう。他から求められた時に見えやすいようにするだけではなく、普段から世の中に働きかけてその認識を高める努力をする必要があるよう思う。学会がこの面で成し得ることは、ずいぶん多いように思うがいかがであろうか。